氏　　名		周　瑞剛
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 27 号
学位授与年月日		令和４年３月２５日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	中国と日本における吉祥図案の研究 ―漢字を含む吉祥図案を中心に―
	研究作品題目	作品Ⅰ　漢字を含む吉祥図案の創作方法の展開 作品Ⅱ　デザイン提案 作品Ⅲ　ポスター表現
論 文 審 査 委 員		主　査　教　授　柴崎　幸次 副　査　教　授　関口　敦仁 副　査　准教授　佐藤　直樹 外　部　愛知県立大学 審査委員　名誉教授　吉池　孝一

１　学位論文の要旨

我々の暮らしの中には、無病息災、商売繁盛、家内安全、夫婦円満、子孫繁栄や招福祈願、厄除祈願など吉祥にまつわる人々の願いや考えに基づき、招き猫、だるま、エビス、福助などの縁起物が気づかないうちに存在している。それらの縁起物の品々や吉祥にまつわる考え方は、中国の吉祥観念の影響を受けている。

本研究では、中国の吉祥観念は、生命と自然への畏敬の念に由来し、後に儒教によって洗練され、中国伝統文化の重要な「天人一体」という、人と自然が一体になる核心的な思想によって推進されてきたと考察した。そうした吉祥の観念から縁起物が生み出されたが、それだけではなく、亀･鶴･松･竹･梅が施された衣服や器物、年賀状の干支の柄、屏風飾りの虎の紋様や柄など、日常生活の中にも豊かさをもたらす吉祥図案が数多く存在するようになった。それらの吉祥図案は中国の吉祥観念の産物であり、のちに日本に伝わり、その地域独自の熨斗（のし）や宝尽くしなどの吉祥図案へと発展していった。本研究では、このように吉祥図案は、古代から人の精神的なニーズの拠り所として、また人間のコミュニケーションの媒体として私たちの生活の中で使われてきたと考える。

しかし近年の中国と日本では、多様な地域文化が融合する時代背景の中で、人々の吉祥文化への関心が徐々にうすれてきている。また、吉祥の構成要素である吉祥図案を意識的に捉えることが無ければ、吉祥図案も喪失してしまう可能性があると推察される。歴史の中で数多くの吉祥図案が創作されてきたが、本研究は、吉祥文化を継続的に発展させるため、吉祥の意味をより的確に伝えることができる「漢字を含む吉祥図案」に着目した。しかし先行研究では、漢字を含む吉祥図案の概念やありようが明確にされておらず、結果として総合的な創作方法論が未だ存在しないことがわかった。

そこで本研究では、漢字を含む吉祥図案の概念を整理し、その歴史的変遷から普遍的な創作方法論を導き出し、その方法論に基づいた作品制作を通して現代に相応しい漢字を含

む吉祥図案の可能性を探ってきた。このことにより、吉祥図案の文化を過去から現在、そして未来へ継承していく方法論についての提案を試みた。

具体的には、「定義」「成立の特徴と強み」「歴史変遷」「創作方法」「創作方法の検証と応用」の五つのポイントに重点をおく。そこから、本論を下記の 8 章の構成とした。

第 1 章「序論」では、「研究のテーマ」「漢字を含む吉祥図案について」「漢字を含む吉祥図案の現状」「研究の方法」のそれぞれの説明を通して、本研究の全体像を解説する。

第 2 章「先行研究の整理」では、吉祥図案に関する先行研究と漢字デザインに関する先行研究について述べ、漢字を含む吉祥図案の概念が混在している現状を確認する。

第 3 章「本研究における吉祥観念」では、漢字を含む吉祥図案の概念を明らかにするため、吉祥観念の始まりと具体的な表現を詳しく推論し説明する。

第 4 章「漢字を含む吉祥図案の成立」では、前 3 章の内容に基づき、漢字を含む吉祥図案の定義、成立の特徴、成立の強みの三つの内容を抽出し整理することから、漢字を含む吉祥図案の成立を明らかにする。

第 5 章「漢字を含む吉祥図案の変遷」では、第 4 章で概念を明確にした上で構成している。その内容は、漢字を含む吉祥図案の時代背景と構成要素の変遷を明らかにするため、成立期、発展期、全盛期という三つの歴史的時期をまとめ、漢字を含む吉祥図案の派生の全体像を可視化する。

第 6 章では、「漢字を含む吉祥図案の普遍的な創作方法論」について述べる。その内容は第 5 章に出現させた各時代の構成要素の特徴から体系化し、「漢字」と「モチーフ」の総合性を重要視した上で、「要素の生成」と「図案の構成」という二つのポイントを含んだ普遍的な創作方法論を提案する。「要素の生成」では、［漢字の選択範囲 1］直接式、［漢字の選択範囲 2］連想式、［モチーフの形成方法 1］付加的形成、［モチーフの形成方法 2］固有的形成、［モチーフの形成方法 3］想像的形成、［モチーフの形成方法 4］借音的形成である。「図案の構成」では、［構成方法 1］書体流用、［構成方法 2］書体再構築、［構成方法 3］字図分離、［構成方法 4］字図代置、［構成方法 5］字図複層、［構成方法 6］字図切抜、［構成方法 7］構成方法の複合という 13 種の普遍的な創作方法論を導き出す。

第 7 章「漢字を含む吉祥図案の創作」では、創作方法論の実践の可能性を、作品Ⅰ漢字を含む吉祥図案の創作方法論の展開によって検証する。また、創作方法論に基づき、作品Ⅱデザイン提案、作品Ⅲポスター表現によって漢字を含む吉祥図案を現代のグラフィックデザインへ応用する。

第 8 章「結論」では、第 1 章で提起した「漢字を含む吉祥図案の概念は未だ整理されていないということと、漢字を含む吉祥図案の創作方法論がわかりにくいものになっている。」という問題を解決したことと、第 7 章で提起した研究作品の制作目的を達成したことをまとめて述べ、本研究の結論を提示する。最後に、本研究の今後について述べている。

結論として、本研究では、吉祥文化に関する研究が少ない学術環境の中で、漢字を含む吉祥図案の創作方法論を含めた理論構築と作品の提示による実践的な研究を行った。これらの成果により、これからも人々が漢字を含む吉祥図案に親しみ、創作し、活用できることを期待する。

２　学位論文審査の要旨

周瑞剛の「中国と日本における吉祥図案の研究　―漢字を含む吉祥図案を中心に―」は、これまで数多く存在する吉祥図案を視覚伝達デザインとして捉え、なかでも「漢字を含む吉祥図案」に焦点を当て、廃れつつあるこの概念を、過去から現在、そして未来へ継続的に発展させることを目的とした研究である。これまで吉祥図案の研究は、デザインの研究視点ではその概念が未整理であったが、民俗学や歴史学などの先行研究にもとづき、漢字を含む吉祥図案を体系化し、成立の背景、歴史、構成方法などの基礎理論を明らかにした。さらに吉祥に関する要素の生成と図案構成によりグラフィックデザインとして作品化し、その意味や重要性を人々に伝達することや、様々な媒体で活用可能な方法論として提示した独創的な研究である。

【論文】

第 1 章から 2 章において、テーマである漢字を含む吉祥図案に関する研究の概要、成り立ち、これまでの研究経緯、吉祥図案の変遷の歴史などまとめている。デザインの文化史としての着眼点から中国、日本などの漢字文化圏の中での吉祥図案の成立過程を明らかにしたうえで、「モチーフ」と「漢字」を分析し考察、研究を深めている。第 3 章から 5 章では、研究における吉祥観念を整理し、これまでの先行研究例とは違う視点から、意味の伝達性の高い「漢字を含む吉祥図案」として独自の分類を行い、地域や歴史の上でも広く深い吉祥図案研究にデザインの視点から道筋を開いている。成立プロセスや創作の方法論が見出し難かった研究領域であるが、時代背景、表現の内容、構成要素などの普遍的な創作方法を整理、分析し基礎理論としてまとめている。

第 6 章では、漢字を含む吉祥図案の普遍的な創作方法論として、漢字の選択、吉祥モチーフの形成、図案の構成方法などから、自らの 13 の創作方法論を提示し、デザインの具体例を示している。

第 7 章では、作品Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおいて、これらの方法論の創作図案、展開例、応用が示されている。

第 8 章では、本研究の結論として、概念の体系化、創作方法論の提案、理論にもとづく作品の制作、研究の将来像や今後の展望を述べている。

【作品】

研究作品は、多くの調査にもとづき制作されてきたが、研究の中心である作品Ⅰ「漢字を含む吉祥図案の創作方法の展開」は、本研究において明らかにした創作方法論による 100 点の創作図案（B5 サイズ、カードボックス含む）として提出した。オリジナルの吉祥図案と解釈、方法論にて構成、編集され、様々な吉祥デザインやその意味を参照することができる。作品Ⅱ「デザイン提案」では、おみくじデザイン、レシートの図案、ハガキデザイン、LINE スタンプデザインなど、現代における吉祥図案の応用例として提出した。作品Ⅲ「ポスター表現」では、暮らしの中に現れている吉祥の概念をテーマに 7 点のポスター作品として提出した。

【口頭発表】

口頭発表では、論文の章立てに従い、基礎理論から漢字を含む吉祥図案の体系化、創作方法論の提案から、理論にもとづく作品への展開に関して、展示された作品や資料を紹介しながら発表を行った。作品Ⅰ「漢字を含む吉祥図案の創作方法の展開」では、構成要素の整理・定義、創作方法論 13 種について 100 点の図案を創作し解説を加え、これまで漠然としていた吉祥図案のデザインの創作方法論を体系化した成果を発表した。さらに、作品Ⅱ、Ⅲにおいて、現代に生かす応用例も示され実践を伴う研究内容をわかりやすく報告した。今後、未来に向けて人々が感じる期待感や、また不安な気持などを和らげるデザインとして機能させたいなどの研究目的を、デザインの成果物において明確に示した。

以上のように、周瑞剛はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

３　最終試験結果の要旨

論文、作品、口頭発表に基づき、口頭試問等により最終試験を実施した。

基盤である吉祥デザインの調査研究、創作方法論、作品Ⅰの創作図案などの研究が非常に高いレベルで実施され、価値のある論文と作品成果に結実させることができたと判断した。特に、これまで未整理であった吉祥図案の研究を、過去から現在までの歴史的な経緯による様々な図案が混在する中で、漢字を含む図案で分類することにより研究の軸をつくり体系化した成果は資料としても重要である。審査では、論文には、理論から作品への流れなど示す部分をさらに明確に表現するため、作品Ⅰの図版や解説は、全て論文に掲載するべきなど指摘があった。

最終的には、中国、日本はもとより、特に漢字文化圏で共通する新たなデザイン理論として、国際的にも価値のある成果を示すことができたと評価した。またグラフィックデザインとしても、吉祥モチーフと漢字の造形要素により豊かで多彩な表現がされ、非常に貴重な作品成果を示すことができたと評価した。

この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。